

第 19 回やまぶき会医療分科会 講演会記録

『下町の歯医者を目指して- その道のりと decision making - 』

平野裕之 昭和 56 年（川西学級）卒

はじめに

私は故川西裕明先生が最初に担任として持たれたクラスで過ごしました。当時洛南高校特別進学コースには他の進学校を受験で失敗したのも多く在籍し、入学当初から厳しく生活や勉学を叩き込まれなんとか受験に向かった覚えがあります。進学した大阪大学歯学部は、学年の 1/3 が留年することもあるくらい、厳しい進級判定が下される学部でした。特に最終学年の卒前臨床研修は現在とは比べ物にならない、時に不合理なくらい厳しいものでしたが、そこで頑張れたのは高校時代の経験も生きたからではないかと感じます。その後の人生に於いてエポックとなった出来事を頃金言を中心に講演で紹介させて頂きました。

大学～留学時代

大学卒業時、縁あって学年主任の教授から入局のオファーを受けました。基礎研究か臨床講座に進むか迷っていたこともあり、返事を躊躇していたところ、再度呼び出しを受け、言い放たれた言葉が一番の金言「チャンスは掴め！」でした。言葉というのは、文字にするとありきたりでも、時としてその状況に応じて姿を変えます。この言葉を聞いた瞬間は今でも脳裏に焼き付いています。その後私は人生の岐路で、この言葉を思い起こしながら道を選択してきたように思います。入局後、歯学部から医学部の基礎免疫学の研究室へ大学院 4 年間出向し、そのまま臨床に戻らず米国 NIH へ留学する機会を得ました。これも棚ぼたで得た機会でしたが、オファーがあった時、私の背を押してくれたのは家内の前向きな気持ちであり、「チャンスは掴め！」の精神でした。こうして 2 年 3 ヶ月、異国での生活を送る機会を得ました。

留学中に沢山の尊敬できる諸兄に出会い、ここでも「人間、やれば変わるんだよ」「One Data, One Paper」などの金言を頂きました。いまから思えば幸せな、しかし現地で過ごしていた期間中はずっと思うようにならないやるせなさを抱き続けた留學生活でしたが、なんとか家族共々帰国できる運びとなりました。「たとえ no paper で帰国しても、五体満足健康な心身で戻れば合格」、この言葉の意味もよく理解できました。

帰国後歯科医療界に戻ることになりました。7 年ほど離れていたのが最初は浦島太郎でしたが、習慣とは恐ろしいもので日々臨床に身を置くとすぐに昔を思い出しました。おそらくいろいろな社会経験が形を変えて生きた結果でしょう。

三つ子の魂百までとはよく言ったもので、帰国後 5 年で父親の後を継いで京都の歯科医院へ帰ることになり、その頃、時を同じくして医療分科会の立ち上げ時にお誘いを受け

本日に至っています。

退局から地域医療へ 新たな出会いと社会参加

実は帰京して開業歯科医として働くことは歯科医療人としては「上がり」かなと思っていました。全くの勘違いでした。地域医療に携わることはなかなか奥の深いものです。歯科医師会の会務のお手伝い、大学同窓会の役務、多職種連など、ゴールと正解のない事業に取り組むこととなります。少々厄介かな、荷に重いかなと思った時、少しだけ思い切って踏み出してみると新たな出会いが生まれます。現在、日本歯科医師会から推薦されて、世界歯科医師連盟（FDI）のとある委員会の委員を務める機会を得ています。これは私の個人的な希望でも力量でもなく、間違いなくいろいろな人との付き合いの結果育まれた機会です。

若い皆さんへ

そう、人との付き合いは自分への投資です。洛南高等学校の卒業生という縁で図らずも拙文をご覧いただくことになった、特に若い皆さん。ぜひ、難局に向き合う場面がきたら、一歩勇気を持って踏み出し、「チャンスは掴め！」の精神で道を切り開いて大きく羽ばたいてほしいと思います。